

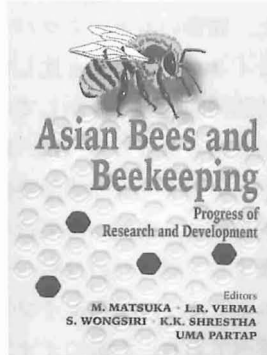
アジア養蜂研究協会



新刊関連図書紹介

「アジアのミツバチと養蜂」 (第4回アジア養蜂研究協会大会会議録)

Asian Bees and Beekeeping. Progress of Research and Development. M. Matsuka, L. R. Verma, S. Wongsiri, K. K. Shrestha, U. Partap 編 (英文), 264 pages, 530 g, US \$ 47.50 Oxford & IBH Publishing Co. Pvt. Ltd.

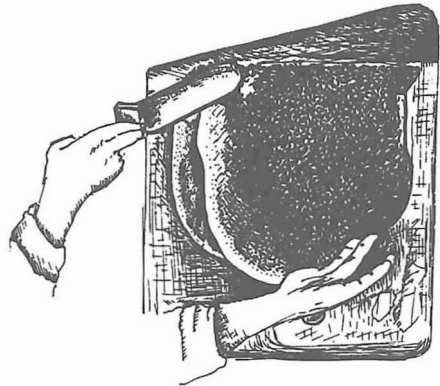


アジアのミツバチと養蜂に関する最新の科学研究成果と振興、開発事業の現状を伝える。特に在来種であるトウヨウミツバチに焦点を当て、その種の保全をめざすと同時に、これを用いた伝統的養蜂を改良し、飼養する人々により多くの実りをもたらすための努力がまとめられている。

本著は1998年3月23日～28日にネパール・カトマンズで開かれたアジア養蜂研究協会(AAA)第4回大会の論文集である。大会を共催した国際総合山岳開発センター(ICIMOD)はヒンズークシ・ヒマラヤ地域の環境が悪化し、生息する動植物が減少するにつれ、山岳地帯の村落も急速に貧困化しているとの認識に基づき、1981年に設立された。自然にも経済的にも健全な山岳エコシステムを確立し、地域の人々の生活水準を引き上げることを目標に、学術研究と開発事業の橋渡し役として、山岳地域

の特殊性に適合した新しい開発方法を立案、促進している。ICIMODは4年間行ってきたプロジェクト“ヒマラヤ地域在来種ミツバチ：その生物多様性を維持し、農業生産性を向上させるための、村落社会に根ざした方法の開発”のまとめとして、AAA大会を招致、開催した。

掲載された150編以上の論文は24を超える国々の養蜂事情、ミツバチ研究を伝える。第1部はアジアのミツバチと新しい養蜂に関する問題や展望をまとめ、さらに大会でなされた提言や決議も巧みに織り込んでいる。第2部ミツバチ生物学ではトウヨウミツバチの優良系統の評価と選抜、合成女王蜂フェロモンがミツバチの行動とハチミツ生産に与える効果をはじめ多彩な内容が論ぜられる。第3部はアジア各地で問題になり、大会時にワークショップも開かれた、ミツバチの病気と寄生ダニに関する論文。



第4部のテーマは養蜂開発事業にも密接にかかわる、ミツバチ飼養や蜂場管理方法の改良、研究について。第5部は今後の課題を多く持つ、アジアでのミツバチ生産物の生産からマーケティング、第6部はアジアでも次第に重要性を増しつつあるミツバチによるポリネーションに関する研究。農作物生産にミツバチの送粉作業が重要な役割を担っていると、多くの農民に理解してもらうことは、第7部の養蜂普及事業、養蜂による村落開発においても大切なポイントである。ICIMODが活動対象とする山岳農業地域では、持続可能な養蜂形態の振興に多くの努力が傾けられており、その活動が報告されている。(榎本ひとみ)

